

水俣－福島を通して見えてきたもの

山田 真

先々週、熊本へ行って熊本学園大学で「水俣学」の授業をしてきました。今日はこのシンポジウムを終えた後、広島へ行き明日、カトリック看護協会の主催する集会で原爆と福島原発事故とのつながりといったテーマでおはなしをすることになっています。こうした経験の中で、広島と水俣と福島とのつながりのようなものを改めて感じているところです。

まずつい最近の話をします。十月十日に福島の国道六号線沿いの地域で現地の中学生・高校生がボランティアでごみ拾いをしました。「福島はもう大丈夫」キャンペーンの一環と考えられます。国道六号線沿いというのはいわゆる浜通りです。福島県は三つの地域に分かれていて、それは浜通り、中通り、会津です。浜通りは海沿いで原発が立ち並んでいる地域です。

中通りは東北本線が通っている地域です。

浜通りは放射線による汚染がひどく中通りはそれに次ぎます。中通りにはホットスポットと呼ばれる放射線汚染の強い場所が沢山あります。そして山を越えた会津は放射線汚染が軽度で汚染の状況は東京並みと云ってよいと思います。

浜通りは今いままのように汚染の強い地域で原発事故から五年を経た今もホットスポットだらけです。そんな場所で、放射線に対する感受性の強い若者にあえてゴミ拾いをさせるというのは人体実験のようなものです。

そんなことをしてまで福島を安全な地域と思わせるようにしているのです。

さて、わたしが最初に福島に行ったのは二〇一一年の六月、事故から三ヶ月ほどあとのことでした。その時、福島とりわけ県庁所在地である福島市は戒厳令下にあるような感じがしました。「放射能がこわいんだ」とか「福島に住んでいるのが不安だ」とか云ってはいけないということが市民の間に浸透してしまっているように思われたのです。それは、太平洋戦争の戦時中、「日本は敗けるかもしれない」と云ってはならなかったのと同じ状況だと思えます。

福島の人たちの中に「このままではいずれ福島は日本から切り捨てられてしまうのではないか」という暗い予感が、事故からわずか三ヶ月で既にめばえ、「切り捨てられないためにどうすればよいか」ということを必死で考えているように思われました。

その後二ヶ月に一度くらい福島に行っています。昨年三月までは「子どもたちのための健康相談会」という形で行ってきましたが、相談に来る人も少なくなり相談会を主催する市民運動体も資金不足、人手不足の状態になり終了ということになりました。その後はわたしの講演会とか交流会とかを福島の人たちが企画してくれてそれをきっかけにして出かけている状態です。わたしとしては「とにかく福島に行き続け福島の現状を全国に伝え続ける人が必要」と思い自分をその一人と見さだめて福島に行くつもりなのですが、福島の人たちにとってありがた迷惑になっているのではないかという気持ちもあります。

福島の復興のためには福島はもう大丈夫、安全というしかない福島の人たちも更に福島以

外の日本に住む人たちも多くが考えている現状でわたしのような存在は波風を立たせるだけの迷惑な存在ということになるのではないかと思うのです。しかし、そんな福島で反原発を基調として運動を続けている人たちはわたしのことを気づかって下さったりもしていて、それで私も自分の活動を続けられています。

またわたしは東京で福島から自主避難している人たちのための健康相談会も行っています。自主避難している人たちは文字通りの流浪の民です。本当は故郷へ帰りたいたいだけけれど故郷が安全な場所に戻っているとはとても思えない。また帰ったとしても不安な日々を送ることになるだろうし周りの人たちからは「勝手に逃げ出した人」と白い目で見られることになるだろう。そんな思いで自主避難生活を続けているのです。

日本人は一般に引越しになれていないと思います。特に福島の農村部のような所では定住型の生活の人が多く農業を営む人たちは自分の耕す土地を命のように思っていてそこから離れられないという人が少なくないのです。

そういう人たちがやむを得ず避難をすることになり精神的にも肉体的にもダメージを受けているということがあります。

国は強制避難地域の人たちには多少の援助はしたけれど自主避難の人たちにはほとんどなんの援助もしていません。避難先で借りた住居の家賃が無償化される程度の援助しかなかったのですが、この施策も再来年の三月には打ち切れそうです。福島の浜通り・中通りは今も安全に住める地域にはなっていません。中通りでもホットスポットはあちこちにありなかな線量がへりません。再来年の三月になっても状況はあまり変わらないと思われます。そういう場所へ無理矢理帰還させ、そうすることで福島原発事故の幕引きにしようというのが国の意図です。

こうした現状を見てわたしはこの国での「棄民の歴史」を見るような気がしています。

わたしが医者になって最初に関わった社会的な事件というと森永ミルク中毒事件ですがわたしはこの事件と今回の福島原発事故との間はあるつながるものがあるのを感じてきました。

そして、また沖縄の問題ともつながるように思っていました、昨日一冊の本を買って読みそのことがはっきりしたのです。

それは「沖縄の傷という回路」という本でその中に「沖縄の集団自決と福島の帰還は同じことだ」と書いてありました。国が今、福島から避難している人たちに帰還をうながしているのは死なせてもいいと思っているということだということです。国というものは民を捨てるだけでなく死に追いこんでしまうこともあるということです。これはまた若者を戦争に送り出してしまふことにも通じるのです。

「お国のための尊い犠牲として民に死んでもらう」ということをこの国はくり返してきました。

こんなに天災の多い国ですから原発のような危険なものを作れば大事故が起る確率はとても高いわけで、そうすると事故が起った時に切り捨てても国にとって大きな影響がないような地域を選んで原発を設置することになります。

沖縄の場合、恐らく本土復帰と云われた時に「国の中の切り捨てていい部分として沖縄は利用価値がある」と思われたのではないかという気がわたしにはします。そしてわたしたちこの国に住む者は、困難なこと、大変なことは一部の地域におしつけ大変なことが起ればその地域を切り捨てるということをくり返して生き延びてきたように思うのです。

今日の催しは戦後七〇年をふり返るということですが、戦前、戦後という分け方は妥当ではなく戦前という時代と戦後という時代は通底しているのだと思います。戦後といわれる時期は戦時中に生み出したさまざまな負の遺産というべきものをかかえたまま経過してきたのであってそれは実質的に戦時中の続きとってよいだろうと思うのです。この七〇年は平和だったと云われますが実際はアメリカの行う戦争の一翼をになわされてきたわけで、特に沖縄は決して平和ではなかった、戦時中状態が続いてきたのです。そして沖縄以外の“本土”は沖縄には目をつぶって平和をよそおってきたわけです。

戦時中と戦後のつながりで言えば例えば福島は広島、長崎の原爆投下と確実につながっています。

わたしはどうかつにも最近やっと知ったのですが、原爆投下は戦争を早く終らせることにはならなかった、それどころか原爆投下するために終戦を遅らされたという事実があったということです。

一九四五年八月はじめという時点はソ連が参戦しそうになっている時点でした。ソ連が参戦すれば日本のショックは大きくすぐに降伏することになりそうでそうなった場合、日本を敗った功績はソ連のものになってしまいます。アメリカは第二次世界大戦終了後はアメリカとソ連が世界の覇権を争うことになるかと予想していて、その際、日本を降伏させたのはアメリカの力であったということをはっきりさせておかないとアメリカの優位が保てないと思っていました。そこでソ連の参戦よりも先に日本に原爆を落すことが必要だと考えました。また原爆を落す前に日本が降伏してしまうと原爆の威力を試す機会が失われてしまいこれもアメリカにとっては困ることでした。次の戦争に原爆を使うためには原爆の威力がどのくらいのものかどうしても知っておきたいからです。アメリカはウランを用いた原爆とプルトニウムを用いた原爆と二つを作っていて、そのどちらかが威力が強いかも知りたかったため、長崎にも原爆を落したと云われます。広島に投下しただけで日本は無条件降伏を受け入れざるを得ない十分なダメージを受けていましたから長崎には原爆を落す戦略上の必要性はなくそれは完全に実験であったのです。

そして投下した後のアメリカは原爆投下という歴史上最も惨虐な行為を正義の行為であるかのように宣伝しました。もし原爆の投下がなかったなら戦争は続けられ本土決戦になれば百万人ものアメリカの兵士が生命を失った可能性があり日本人も膨大な数の兵士、市民が生命を失っただろう、原爆はそれを防いだのだということです。

また、放射能による健康被害をなるべく小さく見せようとするのもアメリカの戦略でした。原発による死者は放射能によるものではなく熱線と爆風による死だと宣伝されました。

そして残留放射線は健康に影響がないというふうにも宣伝しました。これは一つには広島や長崎に駐留する米兵に向けたものだったとも云われます。

残留放射線が危険なものだということがわかれば米兵は広島や長崎への駐留をいやがるはずだからです。

また残留放射線による健康被害をないことにすれば被爆者が何年か後に健康被害を訴え賠償を求めたりしても「原爆とは関係ない」として切り捨てることもできます。

そのような事情があって低線量被曝による健康被害はないことにされたまま今に至り、今、福島で低線量被曝の健康被害が隠ぺいされることにつながっています。

ビキニの水爆実験においても放射能の影響は極端にわい小化されました。水爆実験当時ビキニ付近には日本の船だけでも千隻が出ていました（中には六回もくり返し被爆した船もあります。水爆実験はくり返し行われましたから。）しかし、第五福竜丸だけが被害を受けたような報告がされました。そして第五福竜丸の乗組員の久保山愛吉さんが亡くなったことだけが大きく報道されました。わたしは今回福島へ行くことになったので改めてビキニ事件について学び直したのですが、そこではじめて久保山さんの死亡の原因が劇症肝炎とされていることを知りました。

久保山さんは被爆後造血系に障害が起り輸血をしなければならなくなりました。当時は売血された血液が輸血用に使われたため久保山さんは肝炎になりました。そして亡くなったのですから確かに直接の死因は肝炎です。しかし被爆しなかったら輸血の必要もなかったわけですから久保山さんの死の原因は放射線被爆だったというべきです。しかしアメリカは「輸血しなかったら久保山さんは回復していた」と主張し、結局久保山さんの死因は肝炎ということにされました。それでアメリカは福竜丸の乗組員に見舞金しか払わず賠償はしませんでした。

このように放射線による健康障害については過小評価され続けてきたという歴史があります。福島でも原発事故以来、健康被害は隠べいされ続けてきました。

隠べいは「きちんとした健康調査、健康診断をしない」という形で行われました。

さまざまな市民運動体や医師などが、事故後なるべく早い時期からなるべく広い地域で住民の健康状態を調べ追跡していくよう求めました。それはチェルノブイリでも健康調査体制が整ったのは事故後四年が経ってからでありそれ以前の四年間は健康状態のデータが空白になっているからでもありました。日本の場合はすぐに健康調査をはじめの体制は作ることができたはずで、そうすると低線量被曝の健康に関する影響の貴重なデータが得られたはずですが、しかし、福島県全体を対象に行われたのは甲状腺のエコー検査のみでそれも若年層に限られました。放射線による健康障害といえばまずガンが挙げられますが、ガンの中でも最も早く起るのは血液のガンと云われる白血病でこれは被曝後二～三年で起ってくると云われます。それでわたしたちは関東・東北の太平洋側くらいの広い地域を対象にした血液検査が必要と考え国に求めましたが国は一切応じませんでした。また福島での甲状腺ガン多発が原発事故の影響かどうかを実証するためには西日本で十万人以上を対象にした甲状腺検査が必要と考えていますが、国は行おうとしません。

このような国の姿勢は低線量被曝による健康被害の実態が明らかになるのを恐れているからだと思えません。

甲状腺ガンについて少しつけ加えておけばこのガンは最近世界的な規模で急増しているガンだということです。アメリカで最近、二〇〇五年から二〇一〇年までの期間について甲状腺ガンの発生率がどのくらいかを調査した論文が出されましたが、それによると一九九〇年代の半ばから世界中で甲状腺ガンがふえてきています。その原因としてはチェルノブイリ原発事故と医療被曝の増加、特にCTの乱用ということが考えられます。

CTという検査では検査を受ける人は一度に七ミリシーベルトぐらいの放射線をあびることになります。CTで浴びるのはX線ですがX線とγ線は性質は同じものですから、七ミリシーベルトと云えば相当な量です。福島では一年間に浴びてもいい線量が二〇ミリシーベルトか一ミリ

シーベルトかなどと論議されてきたことを考えても相当な量であることがわかります。

このCTが日本でも乱用されていて、今、わたしたちは自然放射以外にさまざまな放射線を浴びているわけです。

放射性物質が空間に出てくると半減期の長いものはずっと土中などにしみついていて放射線を出し続けます。

ですから、わたしたちの周りには一九五〇年代から六〇年代の核実験、あるいはチェルノブイリの原発事故、稼動している原発からといろいろな形で放出された放射性物質が蓄積されています。こうしたことの影響への健康への影響をわたしたちは調査する必要があります、またこれ以上の被曝を避けることを考えていかねばなりません。

さて、時間がなくなりましたが水俣病について少しふれておきます。水俣病事件は戦後の事件だと思われていますが実は戦前から始まっています。最初の水俣病患者発生は一九四一年と云われています。チッソという会社は戦前国策会社であって戦争にも貢献したわけです。ですから被害を発生させても国や県や御用学者がチッソの側について動きました。チッソを守るために患者を切り捨てるということに荷担したのです。それは今回東京電力という国策会社というべき企業を国が守ることになったのと同じ構造です。

国策会社が事故を起し被害者が出た時、被害者は切り捨てられます。棄民になるのです。

水俣では多くの患者が未認定のまま切り捨てられましたが福島では今、「放射能が原因と考えられる健康被害は皆無だった。」ということにされそうな状況です。

そして、被災地でない地域に住む人たちは事故のことを見ないふりをし、国の「もう大丈夫」という宣伝を鵜呑みにし、忘れていくようです。そういう形で被災地を切り捨て他の地域は生き延びていくということをこの国はくり返してきました。しかしこれ以上こんなことをくり返せばこの国は決定的な破局を迎えるのではないのでしょうか。

広島、長崎を水俣をそして福島を今一度ふり返ってみて下さい。

ありがとうございました。

